



熊本県山鹿市・日輪寺公園内への移設を経て 湯町川橋(湯町橋)200年

事務局長 上塚 尚孝(熊本県)



熊本県山鹿市の吉田川に架かつていた1972年当時の湯町川橋(湯町橋)
写真提供/上塚尚孝(同年1・16撮影)

江戸時代後半に肥後では、100基以上のめがね橋が架設された。湯町橋は5番目に古く、二つめがね(2連アーチ橋)としては県内最古である。2連のめがね橋は、熊本に10基ほどあるが、菊池川支流の吉田川には同橋の上流に、熊入橋(消失)や大坪水路橋(移設)などの2連橋も架かつていた。

湯町橋を最初に見たのは、1972(昭和47)年の早春。河川改修工事の案内板が立ち、すぐ上流で橋脚工事が始まっていた。

橋の東側親柱を見ると、次の文字が刻まれていた。

右大正元年十二月増築

湯町橋

左文化十一年十一月築設

この橋は豊前街道に架かり、山鹿のまちの西玄関口に当たる。大正元年、同様の石材を使い大きさも同じめがね橋を上流側に造ることので橋を拡幅している。当時の人々の景観重視の姿勢を見るように「偉い」と、高く評価していた。

しかし河川改修により、この橋を取り壊すというのである。当然のように、山鹿市文化財保護委員会と山鹿文化財を守る会は、移転保存のために立ち上がった。その結果、橋は同市の日輪寺公園内に移

設されることに落ち着いた。

1975(昭和50)年5月、移設工事を見に行った私は、そこで初めて支保工を見た。それも2連だ。要石らしい石材には「山鹿郡湯町川眼鏡橋」と文字が刻まれていた。

ははあ、湯の町、山鹿を流れる吉田川を昔の人々は、「湯町川」と呼んでいたのだと納得した。

文化11年は西暦1814年。陸(おか)に上がった湯町川橋(湯町橋)は今年、築造から200年目を迎える。

移設の状況については、復元工事に携わった会員の中村幸史郎さんが詳しい。この橋が撤去から移設に落ち着いた話題があったため、結成されて間もない「日本の石橋を守る会」の第1回大会の開催地は山鹿市となった。



熊本県山鹿市・日輪寺公園内の湯町川橋
(湯町橋、県指定重要文化財)
写真提供/中村まさあき(2010.3.28撮影)

「日本」を誇る石橋のまち」大分・院内町で開催

「いんない石橋フォーラム」報告

大分県宇佐市の院内町は75基の石橋が現存する「日本一を誇る石橋のまち」。宇佐市は郷土の偉人顕彰事業の一環として石工の名棟梁、松田新之助を取り上げ昨年9月21日、「いんない石橋フォーラム」を同町の平成の森公園・農村交流センターで開催した。是永修治市長の挨拶の後、前半は元大分の石橋を研究する会会長の岡崎文雄氏（会員）が「大分の石橋 現状と課題」と題し講演。後半は岡崎氏と上塚尚孝事務局長を含む5人が、「石橋の保存とまちづくり」をテーマに語った。会場には末永暢雄副会長が院内町の石橋絵画を持参し展示した。

写真提供／中村まどあき

会場風景

＝昨年9月21日



石橋のある風景を地元の宝に

◇講演

岡崎 文雄氏

（元 大分の石橋を研究する会会長）

「大分の石橋 現状と課題」



岡崎 文雄氏

私の調査では、全国に2000基余りのアーチ石橋があるようです。大分県には504基、うち院内町に61基あります。

大分県のアーチ石橋の特徴は、2～8連までの多連アーチ橋が多い、水路（井路）橋が多い、架設年代では約9割が明治後期から昭和前期、石の積み方では布積みの橋が多いなどが挙げられます。

布積みが多い理由として考えられるのは、明治25～39年にかけて、工部大学校（東京大学の前身）卒業の新しい技術を持った技師3人が、大分に来て国道整備を行ったことです。それ以降、大分の石橋は乱積みから、長方形の石材を規則的につなげ、接合面にセメントを使用した布積みの新工法に変わっていくのです。

現在も国道10号・210号の旧道に



両合川橋（国登録有形文化財）
1925（大正14）年架橋、棚田の風景に溶け込む単一アーチ
壁石は棚田の石垣と同様の自然石の乱積み



鳥居橋（県指定有形文化財）
1916（大正5）年架橋、石工棟梁は松田新之助、設計者は都留清一郎、細く高い橋脚が優美な布積みの5連アーチ

多くの石橋が残っていますが、まず県の直轄事業として幹線道路に丈夫な永久橋として石橋が架けられます。その後、支線の道路に寄付金などで地元の住民によって多くの石橋が架けられました。

ところで、大分には布積みの石橋が多いと述べましたが、院内町の75基の石橋のうち布積みは10基程度だったと思います。院内町は従来の乱積みが多いのです。大分では例外の地域になります。

大分の石橋の課題としては、「守る、伝える、生かす」で考える必要があります。

「守る」では、丈夫な「馬溪橋」（中津市指定有形文化財）のせいで洪水被害が拡大したと、地元住民が架け替えを要望していると聞きます。被災された住民の意思ですので尊重するのが当然でしょう。ただ、大正12年の架設当時は地元の

希望で架けた石橋が、今は見放されてしまったことに悲しい思いがいたします。

豊後大野市と臼杵市の市境に架かる「虹潤橋」ですが、平成11年に国の重要文化財に指定されましたが、どういう訳か駐車スペースもトイレもない状況です。

「伝える」では、豊後大野市の日本ジオパーク認定（※）により、多くの人に土地の魅力を感じてもらえると思います。私は大分県全体が、ジオパークに認められてもいいような地形だと思っています。

「生かす」では、石橋だけでなく、石橋の架かる美しい風景を後世に残し、地元のために生かしてもらいたいものです。

今後も院内町では石橋のある風景を「まちの宝」として残してください。

※「ジオパーク」のジオとは地球のこと。地形や生態系と人間生活の関わりを考えられる場所。地元ガイド養成が認定に不可欠

◇パネルディスカッション 「石橋の保存とまちづくり」

パネリスト

岡崎文雄氏

向野 茂氏(宇佐市文化財調査委員)

高野 弘之氏(豊後大野市教育委員会)

上塚 尚孝氏(熊本・東陽石匠館館長)

コーディネーター

桜井 成昭氏(大分県立歴史博物館)



上塚 尚孝氏

桜井 豊後大野市の高野さんは、同じ大分の院内町をどう見えていますか。

高野 うらやましい限りです。石橋への案内板や標識、パンフレットなどもよく整備されています。欄干が低い橋にはPTAが子どもに注意を促す看板を立てることで、欄干を改修せず昔のままの姿を保とうとしています。

桜井 熊本と大分では、石橋の特徴に違いがあるのでしょうか。

上塚 熊本には江戸時代に架設された石橋が多く残っています。石材の接合面をセメントなどで接着を行わない「空積み」という工法で造られ、水面からアーチが始まっています。それに対し大分

の石橋は、まず橋脚を立て、その上にアーチをこしらえてあります。

桜井 岡崎さんの講演を聞き、院内町では新旧の工法を見ることができるとを知りました。

岡崎 江戸時代は備前から石工集団が豊後に来て、干拓工事などをやりました。豊後の熊本藩の飛び地では、肥後の石工が石橋を架けたと推定されます。幕府直轄地だった日田には、筑後の技術が伝わったようです。ただ「虹潤橋」にしてもそうですが、技術の伝搬を裏付けるに十分な資料は残っていません。

上塚 熊本城の石垣には、山から割り出した石がそのまま使われています。形が非常に不規則なので、石工棟梁が順次、石の積み方を指示し工事が進められたようです。やがて時代が下ると、石材の形や大きさをそろえた「間地石(けんちいし)」を使うようになります。石材の規格化が進むことで、乱積みから布積みに積み方が変わっていつ



桜井 成昭氏



高野 弘之氏

たと考えられます。

向野 院内町には昔は石工集団がいて、間地石を造っていました。昭和26年

若者の参加が重要に 岡崎氏

石橋は大事な文化財 向野氏

地元再評価の動きへ 高野氏

技術者の養成を図る 上塚氏

石橋を地元の魅力に 桜井氏

前後、「鳥居橋」そばの「松木橋」(現在はコンクリート巻き)を架ける際、県は木製、コンクリート製も検討した結果、工期が短くコストが安いということで、石造アーチ橋を架けたと聞いています。

桜井 橋を1つ造るのにも、地域に石橋を架設できる集団がいなければならなかった、ということかもしれません。

上塚 豪雨などで石橋が被害を受けた場合、修復が必要になります。その際、

築造年代ごとにその時代の技法で修復しなければなりません。技術の習得は簡単ではありませんが、日本の石橋を守る会では、そうした技術を習得するための石工養成講座を3年前に始めました。

高野 豊後大野市は日本ジオパーク認定をきっかけに、地域を再評価する動きにつなげていきたいと考えています。

向野 院内町では皆さんが、地域活性化に取り組んでいくという機運になっています。遠方から来てくださる人のためにも、石橋を文化財として大事にしたいものです。

岡崎 この地域も過疎化・高齢化が進んでいきますので、今後は若い人を巻き込んだ活動がより重要になってくると思います。これからも、まちの活性化につながる方策を検討いただきたいと思います。

桜井 ふるさとの魅力はいろいろありますが、本日は石橋という切り口で、地元の良さを見つめ直すことができると気付かされました。



向野 茂氏

父親たちが汗をかき石橋を築造

小学校に「父の背橋」 大分・院内町

大分県の宇佐市立院内北部小学校校庭に保護者が、2連石造アーチ橋「父の背橋」を築造。PTA活動の一環として2008年に始まった石橋造りは、4年の歳月をかけ11年に完成した。近くに児童らの手書き案内板が立てられ、保護者らが作った石橋や地域への思いを込めた歌が学校で歌われているようだ。石橋築造の状況や感想について、同校父親部部長の河野修一さんに話を聞いた。(2013年9月23日広報部取材)



左は工事中=2011年5月8日、右は完成=同年9月25日 写真提供/宇佐市立院内北部小学校

— 小学校になぜ、石橋を造ることになったのですか。

河野 PTA(父親部)の活動として、児童が地域の文化や母校に誇りを持てるようにしたい、作業を通して親睦を深めたい、父親のかっこいい姿を子どもに見せたいという目的がありました。当時

部長の宮丸尚幸さんが建設会社の経営者で、作業用機械や石を扱う道具もそろっていました。学校に提案し、安全面に十分配慮して進めることになりました。

— 石造物の築造専門家がメンバーにいたのですか。

河野 専門家といえる人



校庭に築造された父の背橋
=2013年9月21日 写真提供/中村まさあき

はいませんでした。学校で説明会がありました。地元の石工さんに石橋の工事手順を聞いて、図面と作業用の資料が用意されました。

— 作業は順調でしたか。

河野 地元工務店から情報を得て、古い家を改築した際の敷石や庭石をもらいました。石をカッターで切り、ドリルで矢穴を掘りハンマーでたたいて割りました。2008年から始め、延べ152日・約900人が参加し、完成に4年かかりました。

— 苦労されたことは?

河野 細かな作業を指導してくれる人がいなかったこ

とです。皆が見様見まね、試行錯誤の連続でした。また、途中で作業に人が集まらなくなったので、参加者を促す工夫が必要でした。それで、焼き芋大会や豚汁の昼食会を兼ねるなどしました。

— 築造中に印象に残ったことなどは何ですか。

河野 要石がうまくはまってい、アーチが2つできたときは達成感がありました。それから、土台も石材の接合部分もセメントを使い、しっかりと補強していますが、支保工を外すときは、崩れやしないかとドキドキしましたが、大丈夫なのでほっとしました。

— 今のお気持ちなどをお聞かせください。

河野 当初の目的を達成でき、学校に残せるものができて、よかったと思っています。今後は橋の下に水辺の環境、ビオトープを整備し、児童が自然の中の生態系を学べるようにできればと考えています。石橋の近くで何か行事を行い、地域の方々と一緒に子どもを育てていきたいと思っています。

大分・院内町 石橋保全に向け「院内石橋プロジェクト」

大分県宇佐市の院内町で昨年8月、石橋の維持管理・保全修復と活用を図るため、「院内石橋プロジェクト」がスタートした。国の平成25年度歴史的風致維持向上推進等調査に選定、同市に委託された事業で、石橋の現状調査を基にした石橋点検手法マニュアル作成、景観に配慮した伝統工法と現代工法の組み合わせによる補修・保全修復技術の確立、石橋を永代橋として保全・活用していくためのガイドライン作成などを行う。

プロジェクトメンバーは、熊本大学大学院の山尾敏孝教授(会員)をはじめ、地元有識者や市民の代表者、行政機関の職員で構成。同町の全石橋75基を対象に、石材のひび割れや開き、草木の繁茂状況などを目視により現状把握する実態調査、石橋の強度を知るため縮小模型を製作して各種実験が行われた。壁石を積んだ石造アーチ橋模型を使った実験は日本初とか。

石橋の補修・点検手法や手順に関するマニュアルやガイドラインは、今年3月までに完成を目指している。また同プロジェクトは、古い写真・図面や手記などの貴重な記録、石橋に関する逸話などの掘り起こしなどにも取り組んでいる。大きな成果を期待したい。(広報部)

九州の石橋を訪ねる旅② 大分県九重町を訪ねて 「紅葉と石橋ツアー」報告

副会長 末永暢雄(長崎県)

写真提供/末永暢雄

去る11月2、3日、大分県九重町を訪ねた。前号(83号)で報告した「桜と石橋ツアー」(熊本県上益城郡方面)に続く第2弾。長崎県佐世保市発のツアーを募集すると、わずか2週間で19名の参加定員に達した。東京から会員の横田寛子さんも参加された。

初日、9時半に佐世保市を出発し九重町に到着すると、まず石橋訪問には欠かせない「うどん亭都」で昼食を取った。店主である宇都宮重信さんは大の石橋好きで、ご自分で撮影された大分県の石橋

の写真をお店の壁という壁に展示されている。

「日本一高所の石橋」に感激

九重町には10基の石橋が現存している。最初に訪れた石橋は、「通水橋」とも呼ばれる「右田水路橋」。大分県には井路ともいわれる、水路に架けられた石橋が多い。県内にある505基のうち63基が水路橋である(本会調べ)。

次に向かった先は、野上川に架かる「深瀬橋」「藤ノ尾橋」「妙見橋」。明治30年前後の県道(現国道210号)改修の折に架けられたが、各石橋が架かる箇所はその後旧道となり、新たな国道210号に交通を譲っている。

いずれも輪石に比して大きめの契石が使われており、大変にしっかりとしたアーチを形作っている。壁石はそれぞれ、布積み、打ち込み剥(は)ぎ、乱積みと、違った趣を出している。共通しているのは、親柱や欄干(おそらく当時のもの)がコンクリート製でおしゃれなデザインであること。ただ残念ながら、そのどれもがかなり傷んでいた。

さて、今回のツアー参加者の最高年齢は84歳で、平均年齢は68歳。コース検討の際、悩んだのが「妙見宮車橋」。妙見宮は宝山(816m)の中腹付近にある宝



左、妙見宮車橋。右上と右下は、同橋へ至る山道を登る参加者

八幡宮の別宮で、八幡宮から600mの場所にある。「日本で一番高所にある石橋」といわれ、そこに続く道は岩場で傾斜がきつく、とても険しい。通常は片道1時間ほどかかり、健脚でなければならぬ。そのことを参加者に伝えたと6人が手を挙げ、私を含め7人で向かうことにした。

7人は妙見宮車橋へ、思いのほか早い約45分で到着した。そこはそそり立つ岩、足がすくむような場所。「なんでこんなところに?」「どのようにして架けた?」と感動の声が漏れた。

湯坪温泉の民宿ではおいしい郷土料理を食べ、温泉で癒された。翌日は紅葉

の散策。飯田高原、タテ原湿原、夢の大吊橋、九酔溪、そして龍門の滝を巡った。

高原の紅葉を満喫

今回のツアーでは朝から降り出した雨も、バスを降りる時には止むという幸運に恵まれた。石橋周辺の紅葉はまだ少し早く残念に思っていたが、高原の紅葉はこれでもか、これでもかの「百倍返し」。車内では唱歌「紅葉」を歌い、楽しい、楽しい九重町の石橋訪問だった。

今回の訪問では、都うどん亭の宇都宮さんをはじめとする地域の方々により、石橋周辺の草払いなどをやっていただいていた。また、九重町文化振興会の藤澤昌由さんには宿の紹介をはじめ、この日一日中ご案内をいただいた。



深瀬橋で記念撮影



飯田高原の紅葉

2013年度 肥後種山石工技術継承講座 課題確認し技術磨く受講者

肥後種山石工技術継承講座は2013(平成25)年度で3年目となり、受講者たちは熊本県上益城郡山都町の緑地広場で、「踊水橋(ようすいきょう)」「緑地広場A橋の再架設、花蓮橋(かれんきょう)の架設に取り組んだ。また本講座は、循環型社会づくりを目指すリデュース・リユース・リサイクル推進協議会に評価され、本会と尾上二哉会員が経営する尾上建設(同町)が会長賞を受賞。13年度講座について、尾上会員に振り返ってもらった。



写真提供／中村まさあき
解体し石材を調整して
組み直した踊水橋

講座への参集が新たな課題

肥後種山石工技術継承講座実行委員

会員 尾上一哉(熊本県)

2013(平成25)年度は、前年度に完成した実習橋「踊水橋」の解体・組み直しと、3つ目の同「花蓮橋」の新築を計画しました。

踊水橋は、前年度計画では12月に完成予定でしたが、2カ月ほど工程が遅れたために重大な問題が発生しました。技術指導を仰ぐ竹部光春師匠が体調を崩されたのです。指導が行き届かない中での架橋作業となったため、輪石の仕法と仕上げに、種山石工の仕事としては許せない課題が残ってしまいました。

そこで次年度は、組上げた踊水橋を解体・組み直しを計画に入れました。これ

も種山石工の技術を厳格に継承するため必要なことでした。

13年度、再び踊水橋に支保工を設置し、アーチを浮かして要石から順に解体を始め、すべての輪石を取り去りました。手作業で石材表面の仕上げをやり直し、輪石と要石の大きさを調整し、再架橋を行いました。

竹部師匠の許可で支保工を外し、踊水橋のフォルムを見た受講者は、種山石工の技術を継承するとはどのようなことか、納得がいったようです。結果として、現地で「移設復元」に似た実習をしたことになりました。

「花蓮橋」は、幅2・1メートル、径間4メートル、石厚0・3メートル、アーチ部重量約5トンの石橋です。左右岸それぞれ約10メートルずつのコンクリートを打設し、基礎岩盤代わりになりました。大量の石材の中から、輪石としての強度、形状、色、風合いなどを吟味し選り出し、皆で加工を開始しました。

しかし、このころから国の大型経済対策(アベノミクス)による公共工事の大量発注などの影響が始め、建設現場では極端な人手不足が発生。そのため、受講者の参集が難しくなり、毎週土曜の講座が開けないときもありました。

講座はまたしても年を越してしまいました。国の政策がここまで影響することは想定外。次年度がどうなることから、思いやられます。



花蓮橋の支保工架設の様子
=2013年12月

リデュース・リユース・リサイクル推進協議会
「平成25年度 推進功労者等表彰会長賞」

国土交通省から3R(リデュース・リユース・リサイクル)に関する取組みの問い合わせがありました。実は当初、私たちの愛する石橋を書類上とはいえ、産業廃棄物扱いすることに気が引けました。

しかし、壊され続ける石橋が3Rにより守られることにつながれば、会の目的に直結すると考えました。日本の石橋を守る会の活動、種山石工養成講座の3年の実績などを記載し申請した結果、会長賞の栄に浴することができました。

受賞によって、より多くの国土交通省職員の方にこれまでより鮮明に、貴重な石橋の存在を認知いただけるのなら、全国の石橋の保護・活用につながることに期待しています。



遊水橋(手前、2011年架設)と踊水橋(奥、13年再架設) 熊本・山都町の緑地広場



豊岡橋の要石(熊本市北区植木町)
写真提供/中村まさあき

ヒューストーン

幼少時に長崎に住んでいて、祖父からめがね橋造りの話を何度も聞かされたという、熊本市北区在住の中年男性が東陽石匠館に来館された。

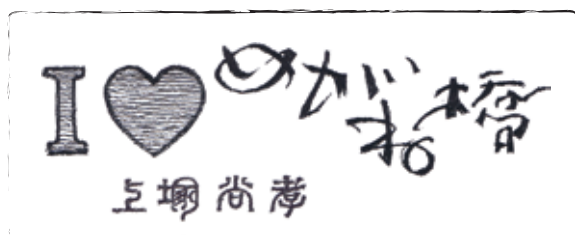
私がアーチの組み立てを模型で実演したところ、男性は「いいさんは、要石のことをヒューストーンと教えてくれた」と話す。私は「ストーンは石のことだから間違っていないけど、ヒューというのは…」と口ごもり、しばらく考えた。

「大切な鍵の役目をする石だからキーストーンなのですが、キー(鍵)をおじいさんはヒューと教えてしまったのかもしれませんね」と言いつつ、男性は「そうかも知れませんが、キーストーンですか。なるほど、やっと長年の謎が解けました」と喜んで帰られた。

(2013年10月16日)

誰の作か、津奈木大橋

熊本県立図書館3階にある郷土関係資料閲覧室で、しばしばお見かけした岡松三平さんが、津奈木町教育委員会職員の方と一緒に東陽石匠館に来館された。年長の郷土史家が「今日は勉強しに来ました」とおっしゃるので、私は恐縮していました。



岡松さんは、

NHK熊本放送局が番組の合同に放映した「くまもとの石橋」(※)の重盤岩目鑑橋(ちようはんがん・めがねばし)の回を見て、その監修を担当した私を訪ねて来られたというわけだ。

「重盤岩目鑑橋は三平という石工が造ったと語り継がれていますが、放映では架設年も石工も不詳とされていました」と岡松さん。「三平は岩永三五郎の実弟と記した本がありますが、実在は不明です。墓も発見されていません」と私は答えた。

数十年前、津奈木町の俗謡を紹介した岡松さんの著述を読んだ記憶がある。惣

庄屋も負傷していたとされていて、片腕に大けがした三平は津奈木温泉で治療し、住民の看護のお礼に石造のアーチ橋「津奈木大橋」を架設し、その恩に報いたと伝えられている。

しかし、津奈木大橋が重盤岩目鑑橋であるとしても、その規模と出来栄を見ると、当時これほどの大アーチ橋を架けられたのは、岩永三五郎と同等以上の腕の持ち主であるはず。三平は三五郎の高弟か…。

頼りにしている古文書「町在(まちざい)」を見ても、三五郎の業績に津奈木大橋の記述はない。彼は1849(嘉永2年、薩摩の甲突川(鹿児島市)に玉江橋を架け(3月7日留入)、川内(薩摩川内市)の江ノ口橋を8月に架設成就した後、郷里の肥後・八代(熊本県八代市)へ戻っている。

岡松さんは「重盤岩目鑑橋の近くにある神社境内に、嘉永2年に衛藤三郎左衛門が奉納した手水鉢があり、これが架設成就の年ではないかと思っています」とおっしゃるが、「奉納は祈願の際に行うものなので、それは橋の架設前だと思っています」と私は述べた。

お互い決め手はなく、思い込んでいただけ。「三五郎の行程から判断すれば、嘉永2年の祈願は可能。しかし架設成就は、湯水期を過ぎた翌3年の春だったのではないか」と私見を述べながらも、別

行動の三平という石工が実在したのかと頭をひねった。

結論は出ぬまま、東陽石匠館を辞された岡松さんらは、八代市鏡町芝口にある岩永三五郎の墓参りをされた。岡松さんから翌日、「墓碑に8人の門人の名が彫ってありましたが、三平の名はありませんでした」と電話があった。

しかし宿題はまだ解決していない。

(2013年5月10日)

※熊本県内各地の石橋を映像で紹介する「くまもとの石橋」は、NHK熊本放送局が制作し、2012年から熊本県内では大河ドラマの前後など番組の合同に約2分間放映。過去の放映分は、会のホームページにアクセス(日本の石橋を守る会)で検索すれば、「石橋リンク集」から見る事ができる。放送は2014年3月で終了予定



重盤岩目鑑橋(熊本県津奈木町)
写真提供/中村まさあき

石橋のある風景

石橋って不思議だなあと
思うことがある。

九州の石橋を訪ねる旅を

始めて12年ほどになる。訪ね
た橋は1500基にもなる
うとしている。



すえなが のぶを 「いし橋」
佐世保市世知原町

橋々に残された逸話や架
橋技術に触れると、また次の
橋へと向かっている自分がい
る。

不思議というのは、「それ

でもなお、ふるさとの小
さな石橋が、よりいとお
しく思われてくる」とい
うこと。

長崎県佐世保市世知原
町の「いし橋」(*)は
1907(明治40)年に架
けられ、1960年代ま
でバスも通っていた。い
までも現役の橋だ。

細く切れ込んだ谷に渡さ
れているが、この上流に10以
も歩けば、川は普通の小川に
なる。なぜこんな場所に架け
なければならなかったのか。
当時の石工たちの高笑い
が聞こえてきそう、そんな
橋姿がこの町の石橋にはあ
る。

(水彩画、文Ⅱ末永暢雄)

* 場所にちなんだ橋名が一般的だ
が、地元でこの橋は「いし橋」と呼ば
れている

森野秀三会員(滋賀県)が

石橋調査文化賞を受賞

20年以上にわたり、全国各地の石橋を
訪れ、調査している滋賀県の森野秀三会
員。このほど文化・経済フォーラム滋賀
の「文化で滋賀を元気に1賞」として「石
橋調査文化賞」を受賞し、2月11日に表
彰式が行われた。

森野会員は、湖南市の大沙川隧道(お
おすながわすいどう)が日本で最も古い
石造トンネルであることを検証、琵琶湖
博物館(滋賀県)などで毎年、石橋写真展
を開催している。それら不断の活動が地

元の文化遺産の大切さを呼びかけるも
のとして大きく評価された。

森野会員は、「受賞により、石橋が多
くの方々の話題に上る機会となればう
れしい」と感想を語った。

文化・経済フォーラム滋賀の「文化で
滋賀を元気に1賞」は、公益財団法人滋
賀県文化振興事業団理事長ほか芸術・
教育・行政関係者などが選考委員とな
り、地域活性化に貢献する人を
2011年から表彰している。13年度
は団体・個人から33件の推薦応募があ
り、選考の結果、大賞を含め1個人・5
団体が受賞した。(広報部)

大分・院内の石工集団を率いた名棟梁 松田新之助をマンガで知る

「日本一を誇る石橋のまち」といわれ
る大分県宇佐市の院内町。明治末から
昭和初期にかけ院内町の石工集団を率
いた希代の名棟梁、松田新之助を顕彰す
る一冊。編集を大分県宇佐市
が行っている。



宇佐学マンガシリーズ③
石橋王と呼ばれた男 松田新之助
日本一の石橋の町が産んだ名棟梁
マンガ/瀬井恵介 梓書院発行

編集後記

4面で紹介した大分・院内町の「父の
背橋」。石橋建造メンバの一人、河野修
一さんは「石橋造りなどやったことのな
い素人」と話されましたが、それでも学
生のころ、棚田の石垣造りのアルバイト
をしたことがあるとのことでした。

院内町では石橋だけでなく、棚田の石
垣もよく目にします。昔から地域住民が
培ってきた石造物を扱う風土が、小学校
への石橋築造という動きにも影響したの
かもしれません。

昔からまちにあるものの魅力を発見
し、それをまちの財産として保全・活用
する活動が、住民の誇りと活気につなが
っていくことを期待したいと思います。

(会報担当 中村まさあき)

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報84号(通算) 2014(平成26)年3月4日発行

代表者 会長 甲斐 利幸

事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2

通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360

HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>

BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>